

黒土館跡

発掘調査報告書(3)

1998-3

秋田県鹿角市教育委員会

序

近年の「遺跡発掘ブーム」は、堅苦しいイメージだった「考古学」を一般の人々が気軽に接することができるものへと導いてくれました。

また、全国各地で、考古学に関するいろいろなシンポジウムが行なわれていますが、その場では、遺跡からなげかけられるメッセージが、私たちに多くのことを教えてくれる、といった内容がよくいわれるようになってきました。

「温故知新」という言葉がありますが、まさに、文化財保護行政を一言であらわしたものではないでしょうか。なんとなくぎくしゃくし、社会全体が病んでいる現代にとって、一番重要なことは「人間が人間らしく生きていた過去」をもう一度振り返ることだと思います。当教育委員会といたしましても、その課せられた仕事の重要性を改めて再認識しております。

本書は、急傾斜地破壊防止事業に伴う、黒土館跡第3次発掘調査の成果をまとめたものであります。館に関する歴史的な資料の少ない鹿角市であります。調査成果をとおして中世の鹿角の歴史の謎を解く手助けとなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力下さいました関係機関・各位に心から厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

鹿角市教育委員会

教育長 浅利 忠

例 言

- 1 本報告書は、秋田県鹿角市花輪字下夕町、字陳場に所在する黒土館跡の調査成果をまとめたものである。
- 2 報告書の執筆は、調査員である藤井安正、花海義人が分担した。
- 3 資料の鑑定については、下記の方々に依頼し、協力を得た。
陶磁器鑑定 青森県浪岡町史編纂室 主査 工藤清泰
石器等鑑定 秋田県立十和田高等学校 教諭 鎌田健一
- 4 土層・土器等の色彩については『新版標準土色帖』（日本色彩研究所）を使用した。
- 5 報告書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の『花輪』『八幡平』『毛馬内』（S:1/2,5千）を使用した。
- 6 遺物の整理・報告書作成の一連の作業は、調査員の指導のもとに、調査補助員・作業員が行なった。
- 7 報告書に収載した図版のスケールについては、各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。
- 8 報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように務めたが、繰り返し使用される用語については、簡略しているものもある。
- 9 図版等で下記のような記号、スクリーン・トーンを使用した。

S D……………空堀

…確認面以下の土層 …空堀・沢

- 10 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の方々よりご指導・ご助言をいただいた。

記して、感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

白杵 勲（奈良国立文化財研究所）

板橋 範芳（大館市教育委員会）

高木 晃（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

本文目次

序

例言

本文目次

図版・表・写真図版目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と周辺の館跡 1
2. 黒土館跡の歴史的背景 2
3. 黒土館跡の立地と現況 2
4. 遺跡の層序 5

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過 6
2. 調査要項 6
3. 調査の方法 7
4. 調査の経過 7

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 帯郭と検出遺構 8
2. 出土遺物 11
 - (1) 陶磁器 11
 - (2) 鉄製品・古銭 11
 - (3) 縄文土器 15
 - (4) 石器・土製品・石製品 15

第Ⅳ章 調査のまとめ 16

参考文献

報告書抄録

図版・表・写真図版目次

図版目次

第1図	黒土館跡の位置	1
第2図	黒土館跡現況図	2
第3図	黒土館跡周辺切絵図	3
第4図	基本土層図・第1～4期構築面土層図	4
第5図	各期遺構配置図	9
第6図	各期遺構配置図	10
第7図	空堀底部集石	11
第8図	出土遺物(1)	12
第9図	出土遺物(2)	13
第10図	出土遺物(3)	14
第11図	館跡分布図	21

写真図版目次

PL 1	黒土館跡全景(1)	23
PL 2	黒土館跡全景(2)	24
PL 3	近景・郭上面トレンチ	25
PL 4	第I期～III期の状況	26
PL 5	第V期の状況・土層断面	27
PL 6	出土遺物(1)	28
PL 7	出土遺物(2)	29

表目次

第1表	出土陶磁器一覧表	15
-----	----------	----

第 I 章 遺跡の環境

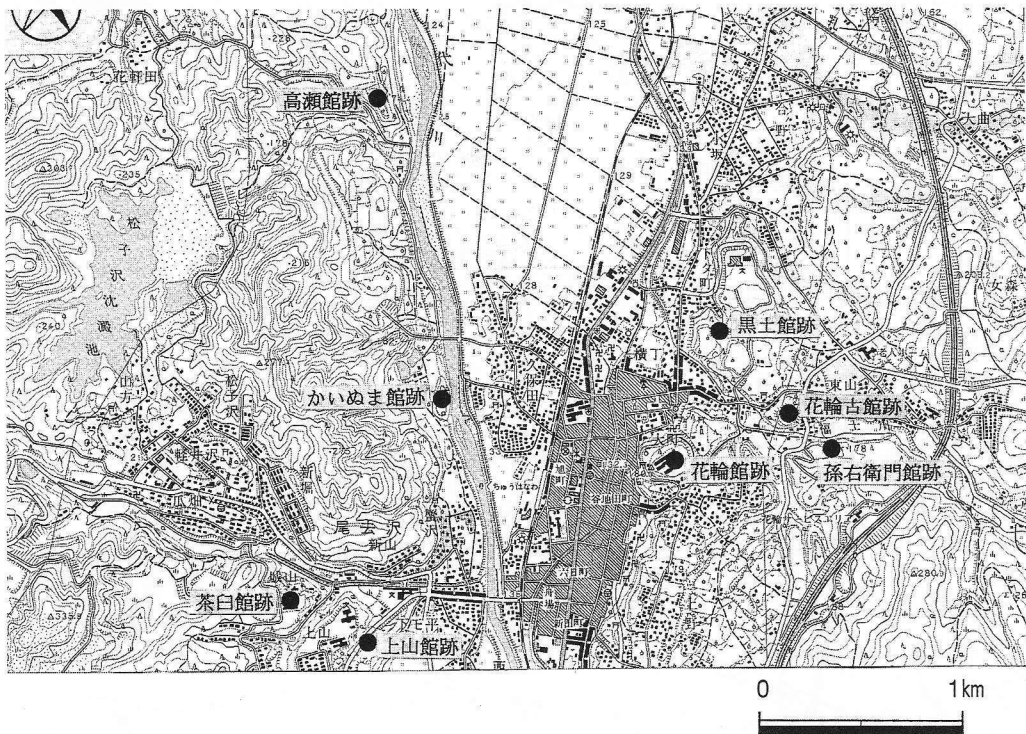
1. 遺跡の位置と周辺的环境

秋田県の最北端に位置する鹿角市は、十和田・八幡平両国立公園という雄大でやさしさあふれる自然にかこまれている。これら豊富な自然を求め、人々がこの地に集まり、古くはその歴史が縄文時代にまでさかのぼり、市内の至る所に縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が分布している。

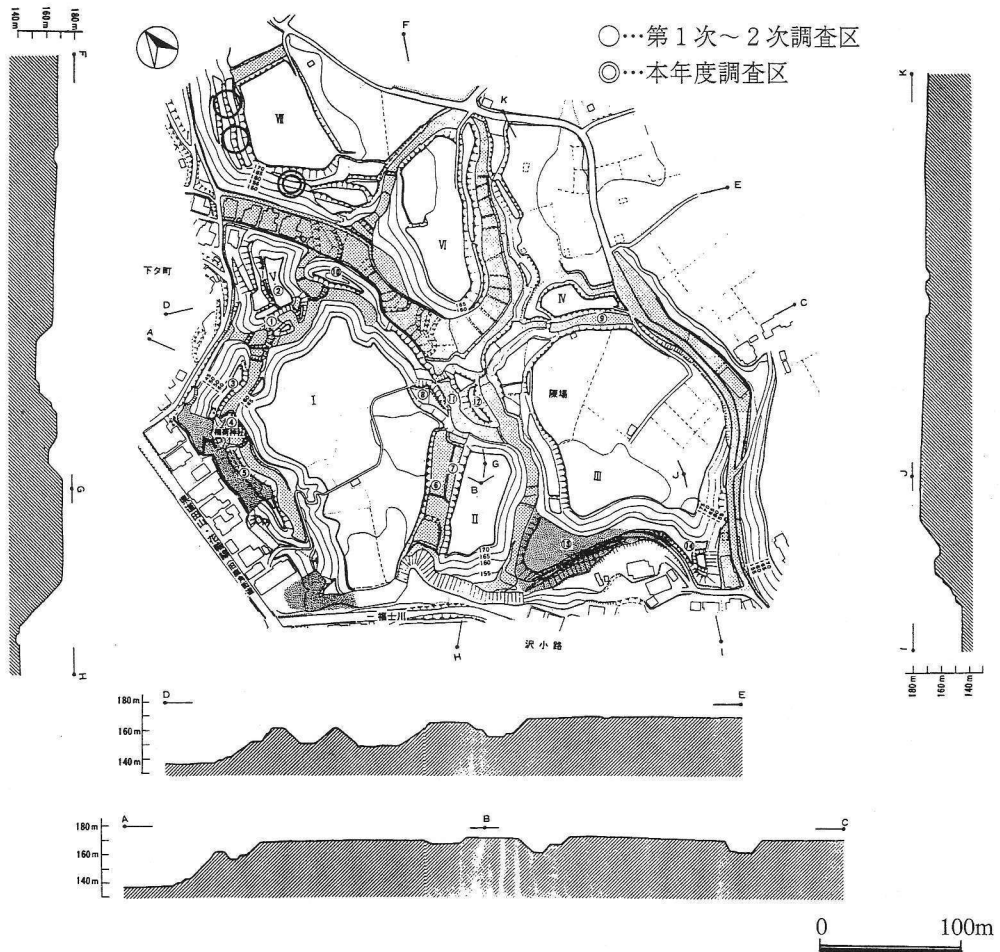
市内を悠々たる水を湛えながら流れる「米代川」は、川を舞台とした多くの伝説・伝記を生み現在でも語り継がれている。そして、鹿角盆地をかこむ周囲の山々から流れ出る、大小様々な支流は、その流域に複雑な地形を発達させている。この地形は中世の代表的な遺跡である「館」を構築するには最適な地形であったようである。それらを巧みに利用し鹿角市には多くの「館」が作られ、その数は42をかぞえ、現在では「鹿角四十二館」として知られている。

本調査地である黒土館跡もその一つで、福士川の右岸台地、花輪市街地の北東端にある。

周辺には東側 500m に花輪古館跡、南東 750m に孫右衛門館跡、南 650m には近世の花輪館跡がある。また、米代川を挟んだ西側対岸には、かいぬま館跡、高瀬館跡等が一望できる。なお、



第 1 図 黒土館跡の位置



第2図 黒土館跡現況図

本館跡郭上面の北東端には、館を区切る空堀を挟んで、縄文時代中期の大集落「天戸森遺跡」がある。

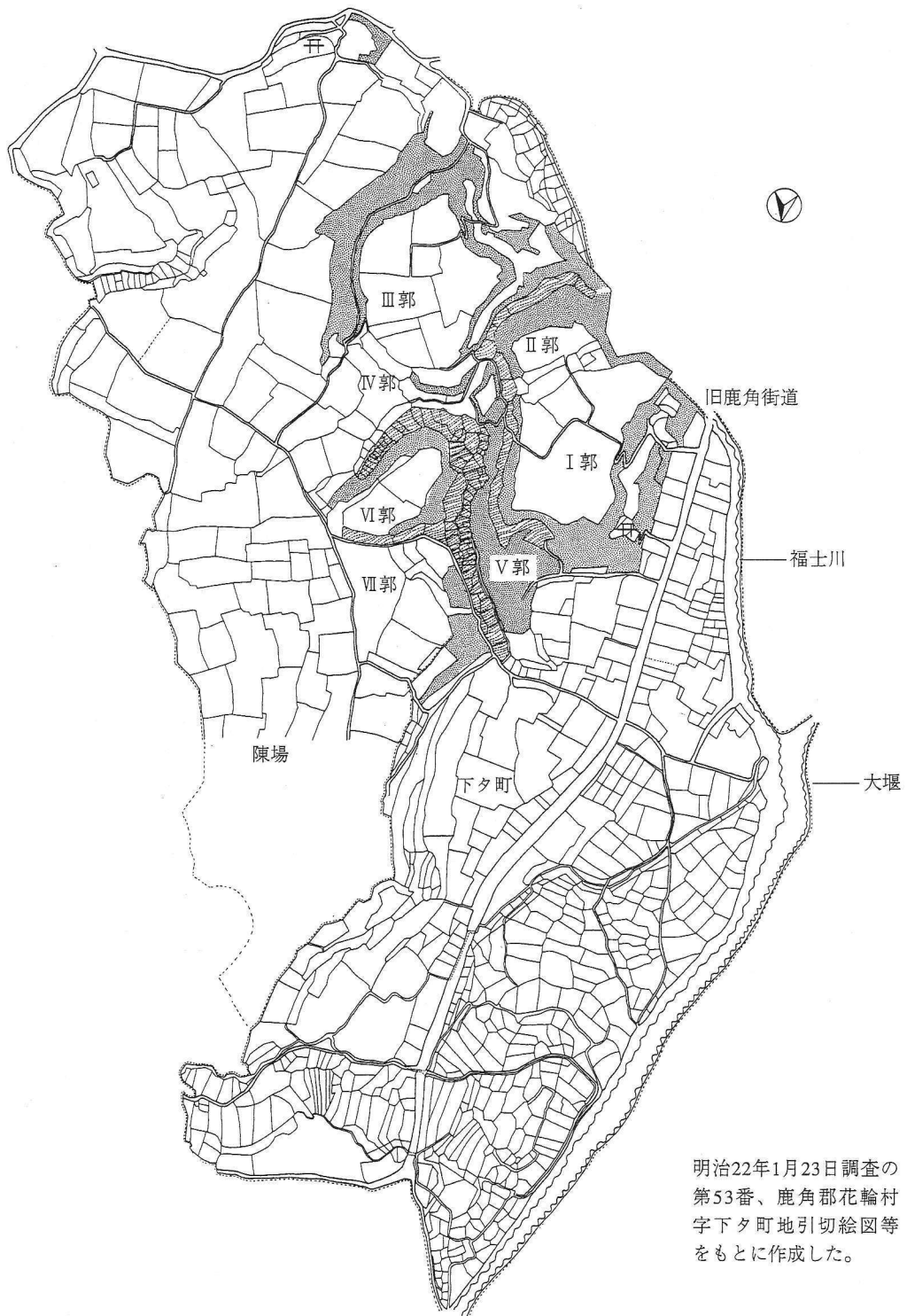
本年度は黒土館跡第七郭南東側斜面を調査した。

3. 立地と現況

黒土館跡の立地と現況については、鹿角市文化財調査資料30『館跡航空写真測量調査報告書 鹿角の館』の「黒土館跡」の「黒土館の立地と現況」を要約した。

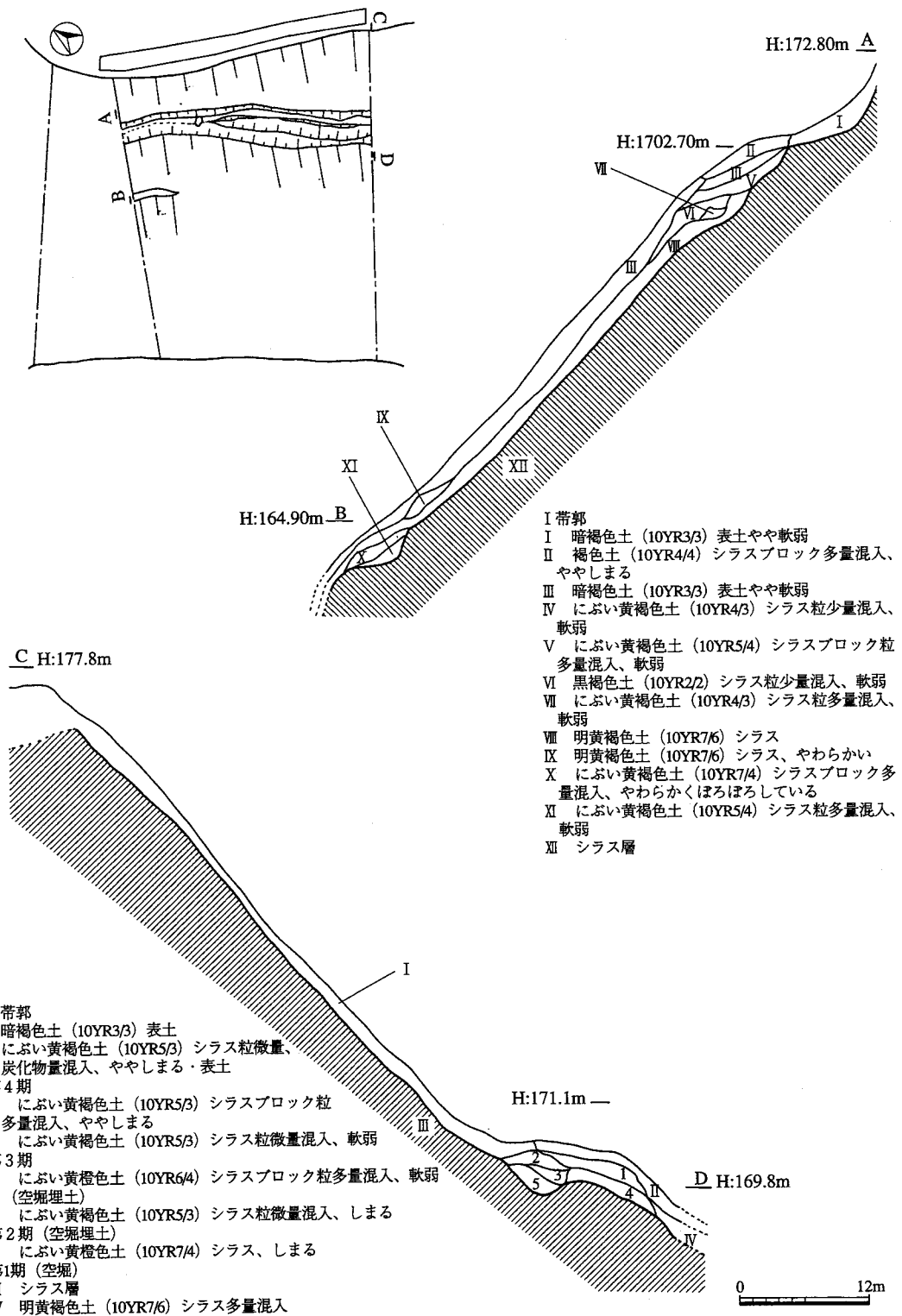
黒土館は西流する富士川の右岸台西縁の「イワの上」と通称される西南隅付近を中心とする東西400m、南北370mの範囲に構築されている。館跡の西縁から館跡内部に大きな沢が入り込み、この沢の西側に計7個の郭が構築されている。

富士川によって、南側斜面の崩壊は著しく、また、急傾斜地災害防止工事による破壊が進んでいる。



明治22年1月23日調査の
 第53番、鹿角郡花輪村
 字下夕町地引切絵図等
 をもとに作成した。

第3図 黒土館周辺切絵図



第4図 基本土層図・第1～4期構築面土層図

第Ⅰ郭（南北185m×東西110m）

Ⅰ郭は、黒土館の西南端に位置する。南東に位置するⅡ郭とは空堀によって、また北東のⅥ、Ⅶ郭とは大きな沢によって区切られている。本郭の南側は断崖絶壁となり、破壊が著しい。郭上面は平坦で、山林・原野・畑地等となっている。東縁部中央付近に通路跡と思われる平場が下方の帯郭・空堀に通じている。Ⅰ郭は、黒土館の主郭と考えられる。

南西端あった平場は土取りによって消滅し、現在は小平場として残る。北側から西側にかけては、土塁が一巡し、Ⅴ郭との間には空堀がある。北東下にも土塁がある。

第Ⅱ郭（70m×30m）

Ⅰ郭の南東側に空堀を狭んで対峙する。郭上面は平坦で、現況は荒地となっている。西縁下4mの北側に細長い平場がある。北東端に一段低い平場がある。

第Ⅲ郭（115m×115m）

本館の南東端に位置する。空堀、沢等により他の郭及び御林堂のある南東台地と区切られている。Ⅰ郭と同程度の大きな郭である。上面は平坦で、北側には空堀が巡り、北西部分には階段状の平場があり、西方には土塁、空堀がある。西側斜面には平場があり、南西部の遺構はほとんど消失している。

第Ⅳ郭（20m×55m）

東端に位置する小さな郭で、Ⅲとは空堀により、西側台地とは沢、小溝により区切られる。

第Ⅴ郭（35m×10m）

Ⅰ郭の北側に位置する小さな郭で、南下方には通路と考えられる小道がある。

第Ⅵ郭（100m×40m）

Ⅰ郭の北東側に位置する。三方を沢に囲まれ、北側の台地とは空堀によって分断されている。

第Ⅶ郭

本館の北端に位置し、南側の第Ⅵ郭とは空堀により区切られ、北側台地とは空堀によって分断されている。なお、北東側から南側斜面にかけてが、本調査地である。

4. 遺跡の層序

遺跡の層序については第4図のとおりである。郭上部に設置したトレンチ部分は、畑地による耕作により地山（シラス層）上面まで攪乱されていた。地山南側部分は深さ3m以上の沢となっている。

第Ⅰ帯郭は9層からなり、ⅠとⅡ層は表土・耕作土である。Ⅲ層は地山（シラス層）であるが第Ⅰ帯郭はこの面を削って、第1期構築面を作り出している。1～5層はそれぞれ第2～3期構築面である。南側郭部分は自然崩壊により原形をほとんど止めていない。なお、南側斜面には犬走りの段差を確認し、これが2段目帯郭になる可能性がある。（藤井安正）

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至までの経過

秋田県鹿角土木事務所では、平成7年度より黒土館跡の北東部において複数年に渡る急傾斜地崩壊防止事業を計画し、秋田県教育庁文化課に発掘調査を依頼した。県文化課では多量の事業量を抱えていることから、鹿角市教育委員会へ発掘調査の打診があった。これを受けて平成6年3月下旬に3者の協議を行い、当教育委員会が調査・報告書作成を行なうことで合意した。

本調査は、これに伴う第3次発掘調査である。発掘調査委託契約を平成9年4月1日に締結し、調査は事業計画を考慮し、同年4月18日から開始することとした。

2. 調査要項

- 1 遺跡名 黒土館跡（鹿角市遺跡番号：306）
- 2 所在地 秋田県鹿角市花輪字下夕町、字陳場ほか
- 3 調査目的 急傾斜地崩壊防止対策事業に伴う発掘調査
- 4 調査面積 447m²
- 5 調査期間 発掘調査 平成9年4月18日～5月23日
整理・報告書作成 平成9年1月5日～3月31日
- 6 事業主体者 鹿角土木事務所
- 7 調査主体者 鹿角市教育委員会
- 8 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課
主任 藤井安正
主事 花海義人
- 9 調査参加者 調査指導員 武藤祐浩（秋田県教育庁文化課 学芸主事）
調査員 安村二郎（鹿角市文化財保護審議委員）
調査補助員 柳沢和仁、前田 泉
作業員 佐藤一男、土井口敬三、間藤儀三郎、苗代沢ノブ、柳沢勝江
宮沢トミエ、柳沢ヤス、柳沢恵美子、佐藤良子、木村千鶴江
柳館愛子、黒川一子、児玉フテ、米村シミ、川又リサ、
高村サツ、木村ミツエ、兎沢サツ子、田中美千栄、
田中栄子、福島美紀子、黒沢文子、関 美也子

10	生涯学習課	課長	佐藤文弥
		社会教育主事	小笠原昇
		課長補佐	村木伸夫
		主査	秋元信夫
		主任	藤井安正
		主事	花海義人

11 調査協力機関、協力者

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県出納局管財課
花輪第一中学校、佐藤 樹、古川孝政、関 直

3. 調査の方法

調査区は、急傾斜地に位置することからグリッドの設定は困難であった。このことから、便宜的に帯郭を大きなグリッドと仮定した。

遺構確認面及び帯郭構築面までの表土・堆積土の除去は手掘りとし、抜根作業は、遺構の崩壊を最小限に留めるため人力とした。遺構については、上面で確認することに務め、確認順に番号を付した。遺物の取り上げは帯郭（上段よりⅠ帯郭～Ⅲ帯郭とした）・各層ごとに取り上げた。

遺構の実測については、平板測量によって、縮尺 1/100 で図化した。

写真撮影には、カメラ 3 台を使用し、作業の進行状況ごとにモノクロ、カラー、スライドフィルムに収めた。

4. 調査の経過

発掘調査は平成 9 年 4 月 18 日から開始し、5 月 23 日に終了した。調査経過の概要は、次のとおりである。

4 月 18 日、作業員への事務連絡、作業説明を行なう。同日より 25 日までは、調査区内の杉枝の処理や抜根作業、土留柵の設営に全力を費やす。28 日より、郭上面とⅠ郭間の斜面とⅠ郭平坦部の表土除去作業を行なう。5 月 6 日よりⅠ帯郭のⅣ期生活面での遺構確認を行ない、同 6 日には、郭上面のトレンチ掘を始める。7 日にはトレンチ部分の写真記録をし、埋め戻しを行なう。同 7 日には、Ⅰ帯郭のⅢ生活面での遺構確認も行なう。9 日にはⅠ帯郭のⅡ期生活面での遺構確認を行ない、写真記録及び平面図作成終了後、層を下げ、空堀を確認する。12 日よりⅠ郭で確認された空堀の精査と、Ⅰ郭下部の斜面の表土除去を開始する。翌 13 日より斜面に作業の主力を注ぎ、犬走りの段差を確認する。写真撮影、図面作成については随時行なった。16 日にはⅠ郭のベルト部分を除去し、全体写真の準備に取り掛かる。

23 日までに、遺構の精査、写真撮影、図面作成等を行い、現地での調査を終了した。

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 帯郭と検出遺構

帯郭はこれまでの調査により、4時期に分けられて構築されていることがわかっていたが、本調査区においても同様の確認をすることができた。北西側斜面は崩壊していたが、本来は昨年度調査地より連続していたものと思われる。空堀も同様のことがいえる。また、Ⅰ帯郭下部斜面で北西側にわずかに残る段差を確認した。本調査区では本来連続するはずのⅡ帯郭は斜面の崩壊により確認することができなかったが、この段差がⅡ帯郭の残存部である可能性が強いものと思われる。

なお、Ⅰ帯郭での構築時期の古い順に記述する。

(第1期) 館跡構築初期のものである。地山(シラス面)の斜面部分を削り、幅3m前後の帯郭を作り出している。さらに、帯郭と平行して長さ19m、幅1m前後、深さ60cmの空堀が構築されている。空堀底部には大小の礫が確認された。空堀内より古銭1点、鉄製品1点が出土した。

(第2期) 第1期で構築された空堀を埋め、それと重複するように再度空堀を作り出す。さらに郭縁際に若干盛り土し、帯郭の幅が広げられている。2期目に構築された空堀は、幅60cm前後、深さ30cm前後の溝的なものである。

本構築面から縄文土器破片4点、石器2点、石器剥片1点、鉄製品2点が出土した。

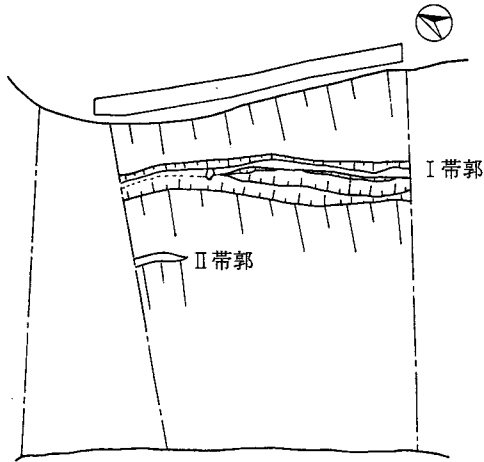
(第3期) 第2期で構築された空堀を埋め戻すと共に、帯郭全体に盛り土を施し平坦にしているが、郭の幅はやや狭まっている。また、郭北側のやや上部斜面部分に幅20cm程の平場を作り出している。これは昨年度の調査区でも確認されており、これからつながってくるものと思われる。

本構築面より、古銭1点、石器1点、陶磁器破片1点が出土した。

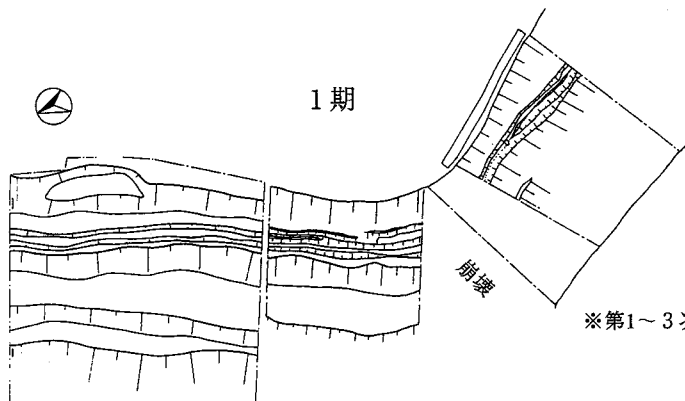
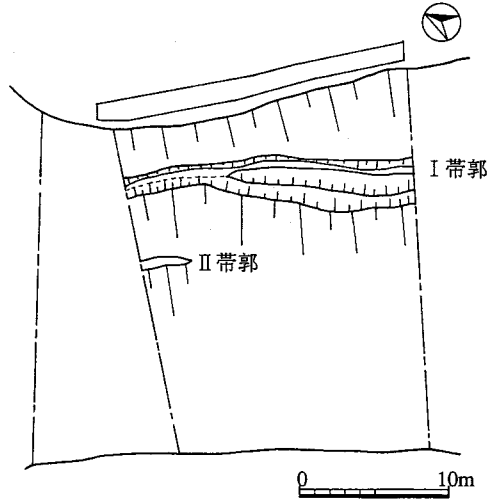
(第4期) 第3期構築面で確認された平場部分まで盛り土し、郭全体を平坦にしている。

本構築面より遺物は出土しなかった。

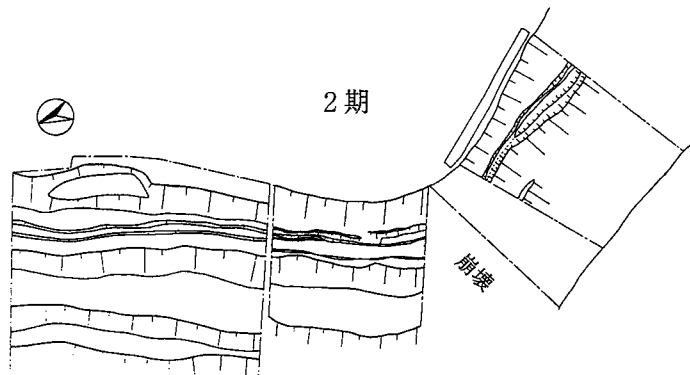
1期



2期

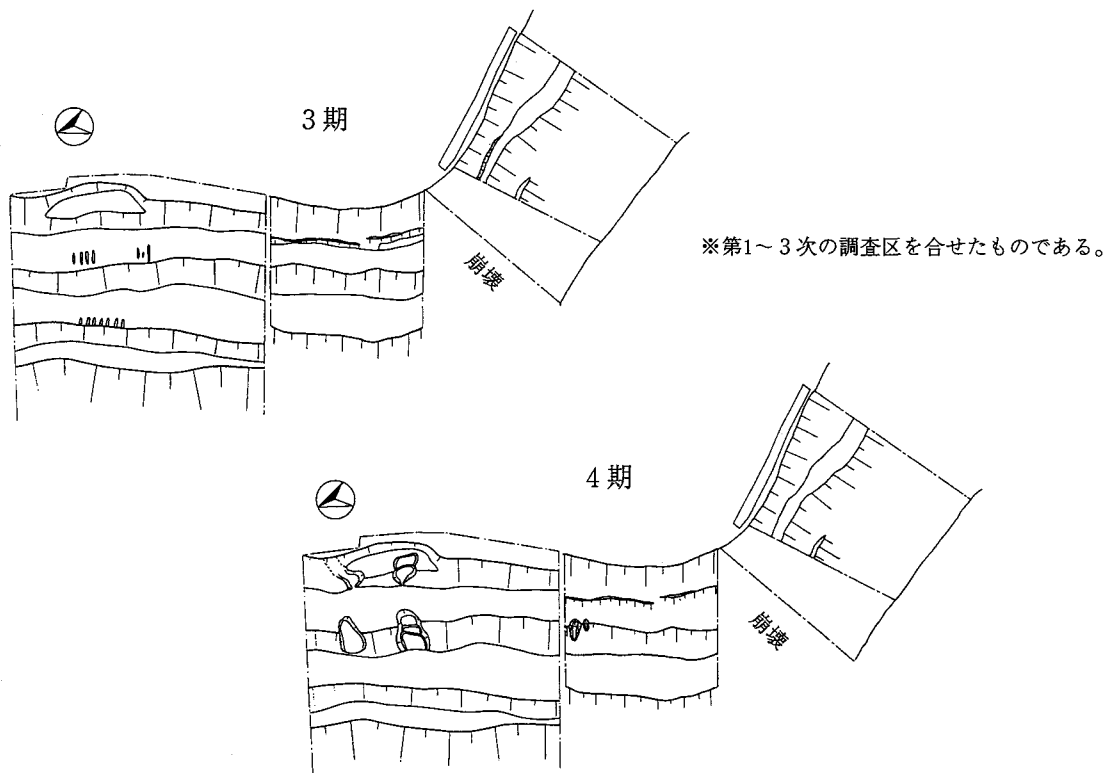
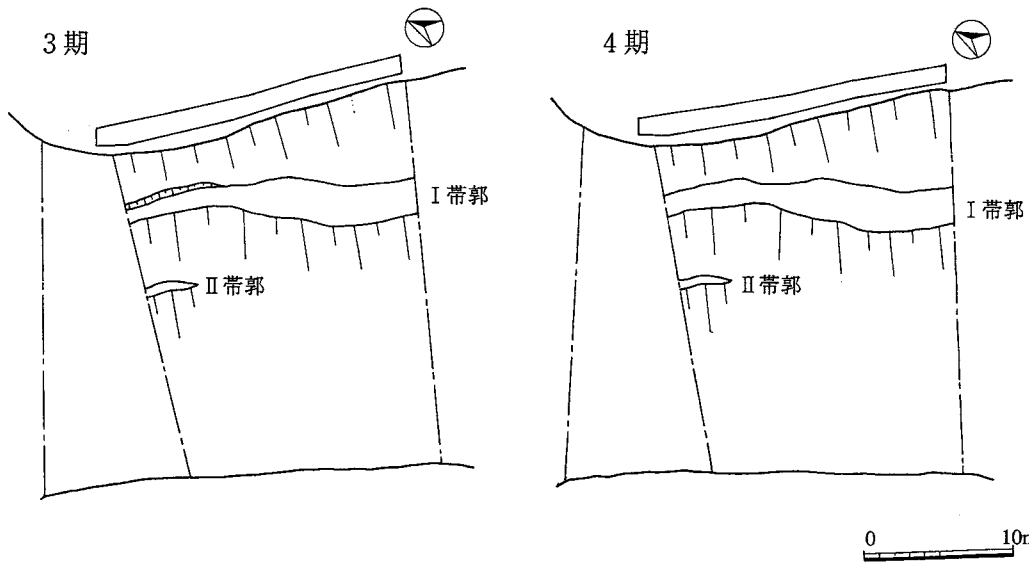


※第1～3次の調査区を合せたものである。

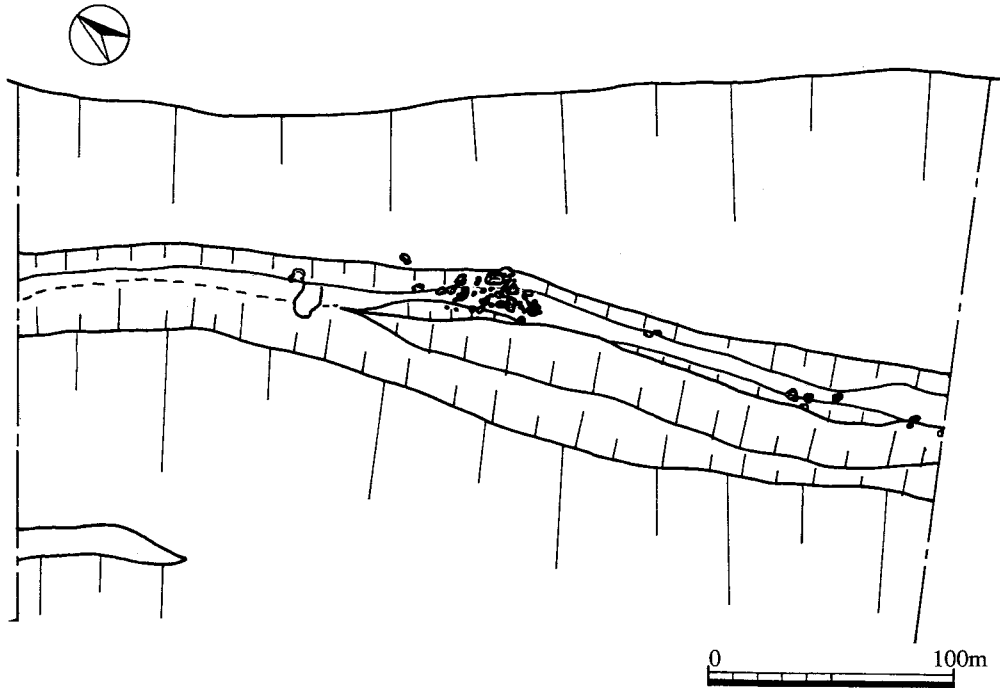


0 20m

第5図 各期遺構配置図



第6図 各期遺構配置図



第7図 空堀底部集石

2. 遺構内・外出土遺物

調査区遺構内・外からは陶磁器、鉄製品、古銭、縄文土器破片、石器が出土した。概要については以下のとおりである。

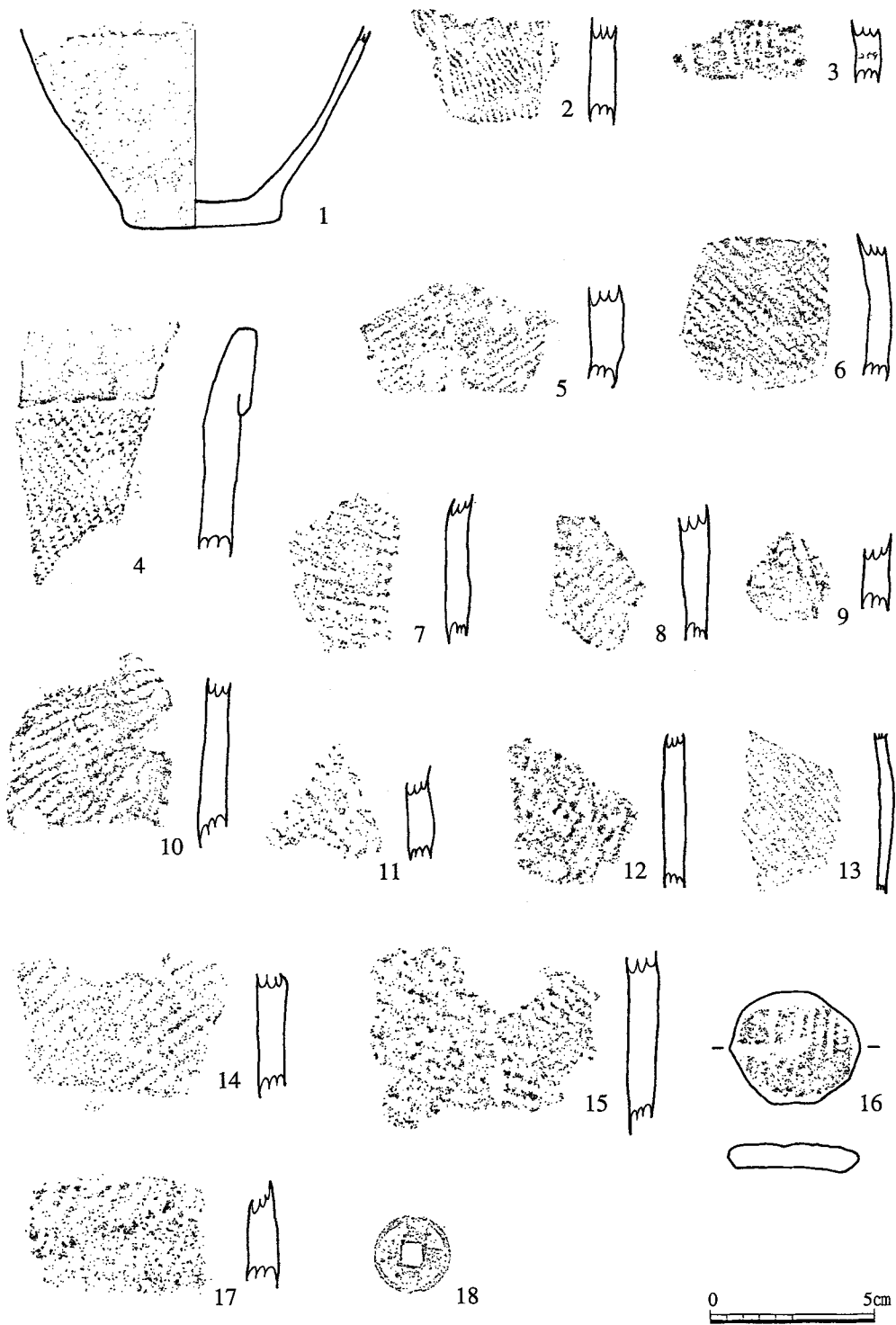
(1) 陶磁器 (PL 7、第1表)

調査区より29点が出土し、すべて肥前系である。1～6は17C後半のもので、1は青磁の皿か小杯で、2は草花文・染付の皿、3は染付の碗、4と5は草花文・染付の碗、6は染付の香炉か鉢である。16は17～18C頃の染付の皿である。7～10は18C後半のもので、7は染付の角皿、8は染付・青磁の碗、9、10は染付の皿である。11～15、17～27は18C前半のもので、15は第3期構築面からの出土である。11は染付の大皿、12は染付の壺、13、14は染付の皿、15は染付の鉢、17は摺鉢、18は鉢、19～24は染付の碗、25～27は染付の小杯である。28、29は18～19Cのもので、前者が瓶で後者が壺である。

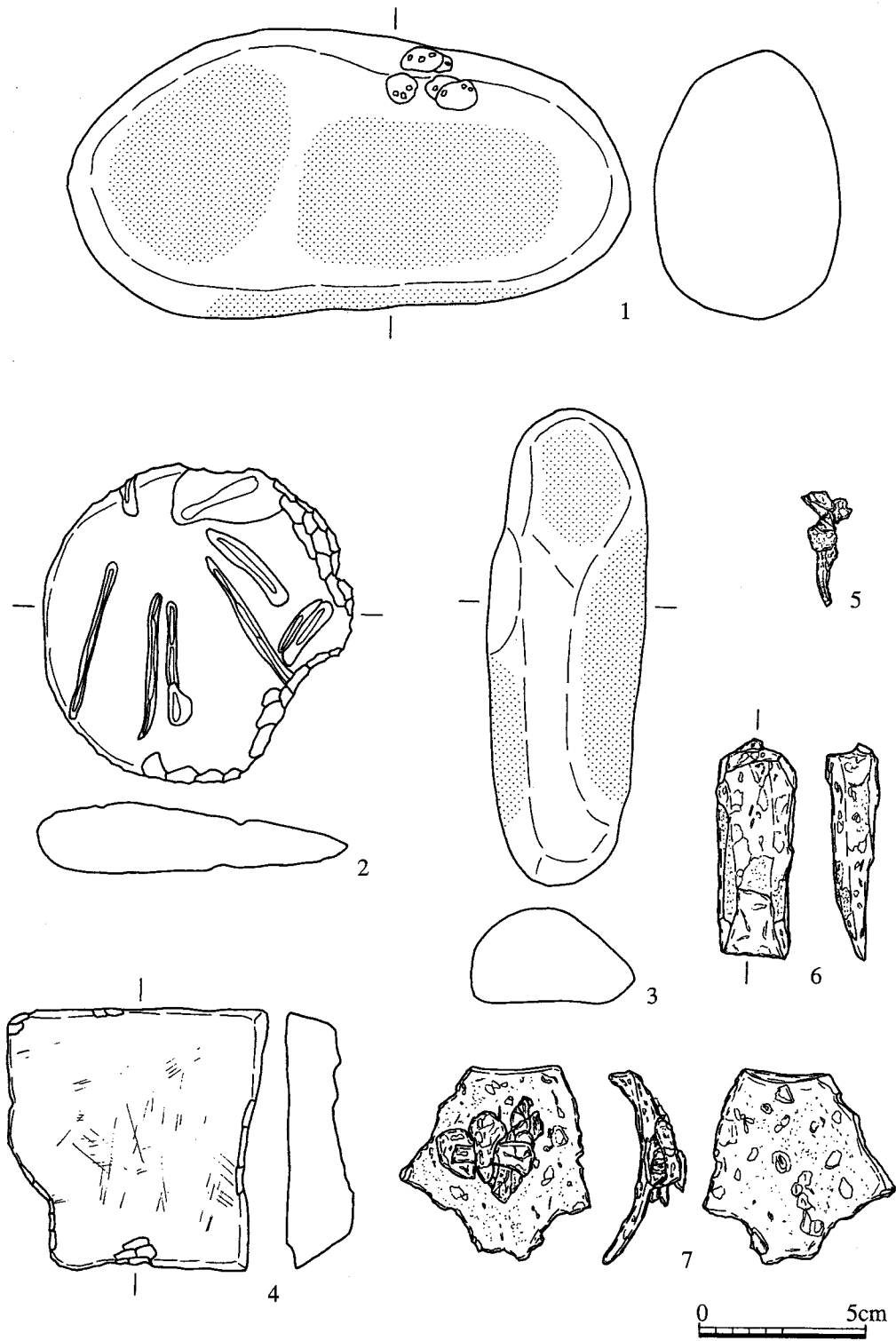
なお、1、4～6、8、11～14、16、17、19、21、22、24、26は第VI郭 (PL 7参照) 踏査でみつかったものである。

(2) 鉄製品・古銭・鉄滓 (第8図、9図 PL 6)

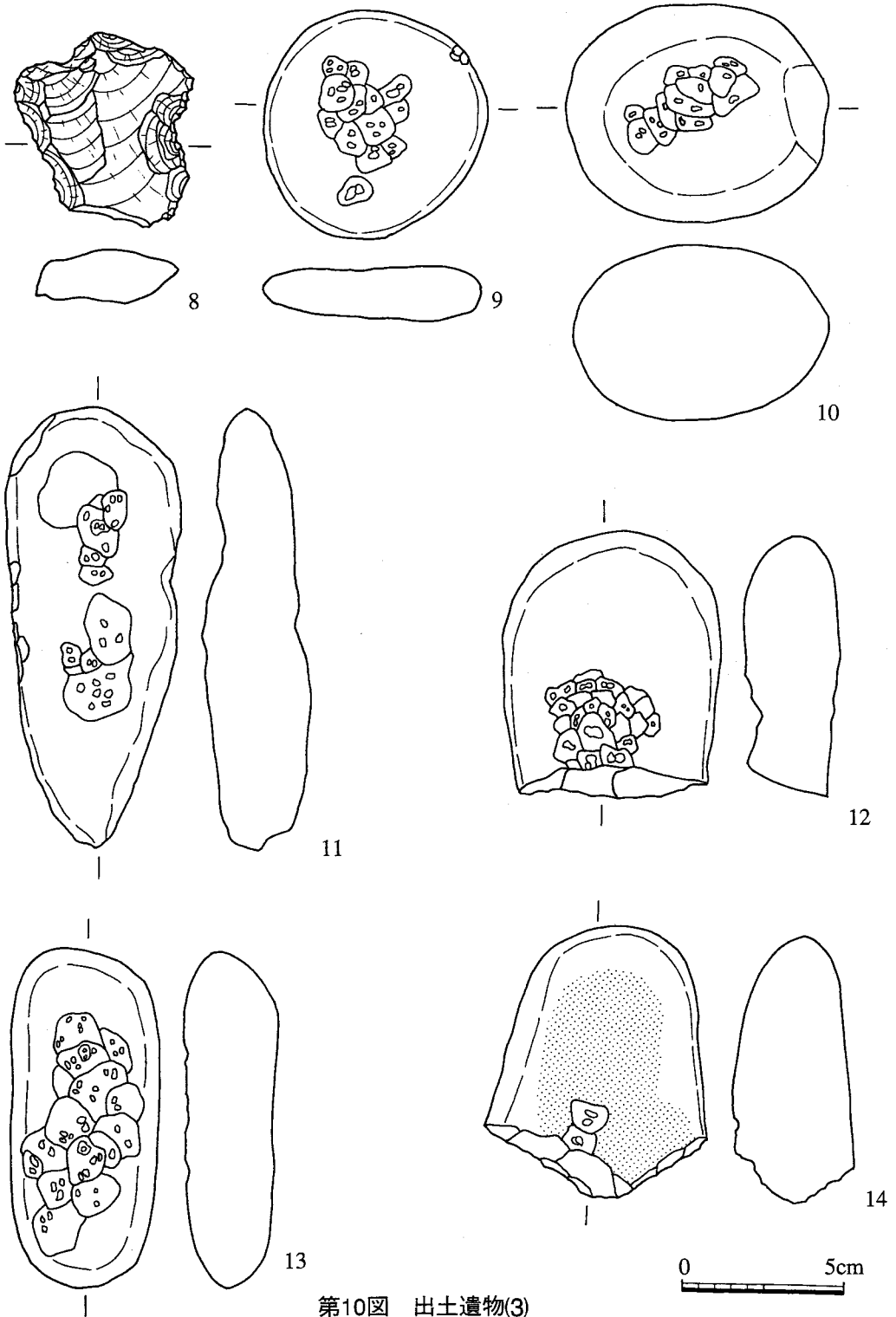
調査区より、用途不明鉄製品1点、クギ1点、くさび1点、鉄滓4点が出土した。用途不明



第8図 出土遺物(1)



第9図 出土遺物(2)



第10圖 出土遺物(3)

第 1 表 出土陶磁器一覽表

番号	出土地点・層位	器種	製作地	製作時期	文様・特徴
1	VI 郭	皿or小坏	肥前	17C後半	青磁
2	I 郭一括	皿	肥前	17C後半	草花文・染付
3	I 郭一括	碗	肥前	17C後半	染付
4	VI 郭	碗	肥前	17C後半	草花文・染付
5	VI 郭	碗	肥前	17C後半	草花文・染付
6	VI 郭	香炉or鉢	肥前	17C後半	染付
25	I 郭一括	小坏	肥前	18C前半	染付
26	VI 郭	小坏	肥前	18C前半	染付
27	II斜面	小坏	肥前	18C前半	染付
11	VI 郭	大皿	肥前	18C前半	染付
14	VI 郭	皿	肥前	18C前半	染付
13	VI 郭	皿	肥前	18C前半	染付
12	VI 郭	壺	肥前	18C前半	染付
20	I 帯郭	碗	肥前	18C前半	染付
23	I 郭	碗	肥前	18C前半	染付
22	VI 郭	碗	肥前	18C前半	染付
21	VI 郭	碗	肥前	18C前半	染付
24	VI 郭	碗	肥前	18C前半	染付
19	VI 郭	碗	肥前	18C前半	染付
15	I 郭	鉢	肥前	18C前半	
10	I 郭	皿	肥前	18C後半	染付
9	I 郭	皿	肥前	18C後半	染付
7	II斜面	角皿	肥前	18C後半	染付
8	VI 郭	碗	肥前	18C後半	染付青磁
16	VI 郭	皿	肥前	17~18C	染付
17	VI 郭	摺鉢	肥前	18C	
18	I 郭	鉢	肥前系	18C	
28	II斜面	瓶	肥前系	18~19C	
29	I斜面	壺	肥前(唐津系)	18~19C	

鉄製品は破損品である、把手のようなものが付いていることから吊り釜のようなものであったと思われる。古銭は興寧元寶（1068年）で、前者の鉄製品とも第1期空堀内からの出土である。クサビとクギは第2期構築面からの出土である。また、第3期構築面からも古銭が出土しているが、腐食がはげしく年代等は判別できない。鉄滓は郭斜面部分やI帯郭から一括して出土した。

(3) 縄文土器（第8図）

調査区より、縄文土器破片が15点出土した。5、7、9、10は第2期構築面からの出土である。ほとんどがLR、RL縄文が施紋されているのみで、これまで同様郭上部の天戸森遺跡から流れ込んだものであろう。

(4) 石器・土器片利用土製品（第8・9図）

調査区より、搔器1点、凹石5点、磨石2点、砥石2点が出土した。11は第3期構築面、13は第2期構築面からの出土である。また、土器片利用土製品が1点出土している。石器、土器片利用土製品はいずれも縄文土器破片同様郭上部の天戸森遺跡から流れ込んだものであろう。

（花海義人）

第Ⅳ章 調査のまとめ

黒土館は、鹿角市花輪字陳場、字下タ町に所在する。館跡は、「皮投岳」を源として流れる「福土川」右岸に発達した舌状台地を、空堀によって区切った7つの郭から構成されている。館跡からは、鹿角盆地北側や小坂の一部分までが見渡すことができ、立地条件としては良好の地である。

本年度は第Ⅶ郭の南西側斜面に調査区を設定した。

調査は平成7年度からの継続調査で、本年度は2帯郭、空堀2条、小平場を検出した。遺物では、陶磁器29点、鉄製品3点、鉄滓4点、古銭2点、土器破片17点、石器11点、土器片利用土製品1点が出土した。

I帯郭では、これまで同様4期の構築時期が確認された。第1期目では斜面のシラス層を平坦に整地し、空堀が構築される。I帯郭の北側部分は崩壊が著しい。昨年度の調査で斜面の自然的崩壊を確認することができたが、この影響であろう。空堀は1期、2期に作られ、2期のものは規模を小さくし、1期のものと重複する。礫は、調査地内ではみられない川原石が多くみられることから、人為的に運ばれてきたものと考えられる。礫は第1次調査時の空堀内からも多数みつかったが、昨年度調査地での空堀内からはひとつも検出されなかった。このことが何に起因しているのであろうか。

昨年度まで検出されていた2段目帯郭は、今回その明確な姿を検出するにいたらなかったが北側斜面において、わずかに残る平場を確認することができた。来年度調査予定地である、本調査地と連続する南側斜面部分で、現況で確認できる平場とほぼ同レベルであることから、この平場部分が2段目の帯郭の残存部として捉えることができる。

昨年度の調査地と本年度調査地の間の斜面が自然崩壊されていたため、帯郭と空堀が第Ⅶ郭を取り囲むように巡っていることを、昨年度は予想のみで終わらざるを得なかったが、本年度の調査に於いて、同様の遺構が検出されたため、このことは確実となった。

なお、北側斜面崩壊の年代特定については明治22年調査の地籍図には既に、崩壊部分が記されている。

遺物は本館の構築時期に直接関連するものは出土しなかった。陶磁器では17C後半～18C前半のものが多くみられる。肥前系の染付が大半を占め、青磁や草花文染付もいくらかみられる。なお、陶磁器は本郭隣接の第Ⅵ郭踏査時に見つけられたものが多い。

古銭は興寧元寶（1068年）が1点、不明が1点出土している。鉄製品はクサビ、クギの他、茶釜のような胴部の一部に把手が付き、吊して使われたものと考えられるものもある。

遺物から、館構築時期を特定できるものは出土しなかったが、帯郭や空堀に数度にわたる改

修が認められることは、築館期、最盛期、落館期、その後…というような館の歴史が黒土館に間違いなくあったことを裏付けるものである。

史料的には、黒土館に関するものはほとんどみあたらない。「鹿角由来集」に黒土館は、秋元氏の館であったと記されているのみである。また、秋元氏に関する詳しい文献もみつかっていないため、黒土館の歴史的背景を解くのは困難を期している。天文年間（1532～）の津軽『郡中名字』に鹿角群の国人四氏の支配郷村として

◎奈良一大湯・小坂・小平・小江刺

◎阿部一大里・柴内・鼻輪

◎成田一田内・夏井・名越・三ヶ田・猿雄

◎秋元一高瀬・長内・小猿辺

とあり、鹿角入りした秋元氏が最初は、黒土館の米代川を挟んだ対岸にある「高瀬館」にその本拠を構えたことを示唆する記事が記されている。当時、一村一館の形態をとっていたとみられていたが、これらの中で現在その名が残っていないのは、「高瀬村」だけである。また、「鹿角由来集」によれば、秋元氏は早い時期に、周辺有力武士団による鹿角争奪戦の過程で、没落・離散したことを示唆する記事が記されているが、秋元氏は村ごと離散したのであろうか。そして、何故それほど早く没落したのであろう。防御として作られた館の構築方に欠点があったのであろうか。館の構築方については今後の課題としたい。

これまでの調査から、黒土館により深く触れることによって、ますますその謎がふかまってきたようである。

来年度予定の本調査地と連続する地区は、当時の現況がかなり残っているようであり、また、本郭と予想される第Ⅰ郭により近づくため、これまで以上の成果が予想される。

調査最終年度である来年度には黒土館の謎によりせまればと思う。

縄文期の遺物は、郭上部北側台地に確認されている天戸森遺跡から流れ込んできたものと考えられる。昨年度調査地では斜面の沢部分から大量に出土したが、本調査区内からはその出土はわずかであった。縄文期の場の使われ方が、沢を一つの区切りとしていたことを示すものであろう。

(花海義人)

付 録

鹿角四十二館 近世初期の成立とみられる『鹿角由来集』には、次のように記載されている。

鹿角四拾二館に侍四十二人居候事

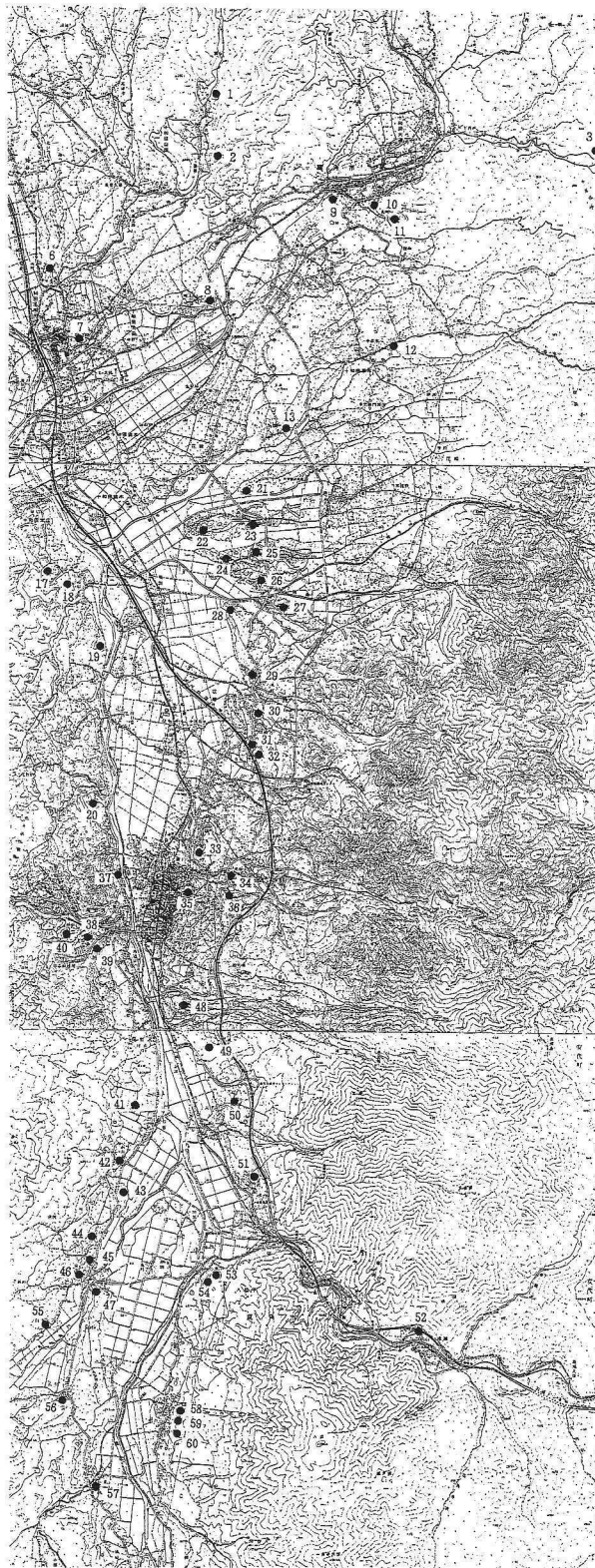
- 一、田山村に田山左京進領地館有、後に畑山三郎領ス
- 一、左比内村、左比内村采女領地館市に館有
- 一、湯瀬村、湯瀬中務領地、本名成田後ニ湯瀬刑部領す、本名安部也、一戸より来り館有
- 一、長峯村、長峯下總領知本名成田館有
- 一、三ヶ田村、三ヶ田左近領知本名阿保館有
- 一、谷内村、谷内三郎領知本名成田館有り、南部御先 御下以後一戸彈正左ヱ門領知本名武田なり、九郎正友と一處に被遣なり
- 一、長牛村、秋元彈正左ヱ門領知館有、彈正左ヱ門秋田牢人後に一戸攝津領知、一戸の二男長牛弥四郎先祖也、鹿角の旗頭に三戸より御一門南部九郎正友被遣石鳥屋村に居、此時一戸攝津一處に被遣
- 一、夏井村、夏井但馬領地本名阿保なり館あり
- 一、長内村、長内刑部領地本名安部なり館あり
- 一、白遷村、白欠勘解由領知館有
- 一、石鳥屋村、石鳥屋五郎領知本名安部也、館有、後ニ南部九郎正友領ス、鹿角三百丁旗頭二三戸より被遣候
- 一、松館村、松館越前領知本名阿保也、館有
- 一、尾佐利村、尾佐利越中領知本名阿保也、館有
- 一、小豆澤村、小豆澤駿河領知本名秋元也、館有
- 一、大里村、大里上總領知知行高千石本名阿保、館有、京都江被遣候上使頭丹治氏
- 一、玉内村、玉内大炊之助領ス本名阿保、館有、津輕へ牢人ス
- 一、花輪村、花輪次郎領知本名阿保、大里上總先 と兄弟也、花輪臥牛本館へ移、其子孫村替にて九戸の圓子へ知行三百石にて被遣、後ニ天正八年大光寺左ヱ門左正親を信直公より知行三千石にて被遣也、村数花輪、尾去利・石鳥屋、三ヶ田・夏井右五ヶ村領知、花輪村ハ大館也
- 一、黒土村、黒土丹後領地本名秋元、館有
- 一、高瀬村、高瀬土佐領知本名秋元、館有、知行村数久保田・用之目・花軒田・松山・高梨子館右六ヶ處也、居館高瀬也
- 一、高屋村、高屋筑前領地本名秋元、館有、秋田へ牢人以後信直公より佐藤近江知行被下

- 一、柴内村、柴内弥治郎領知本名阿保、知行三百石なり、花輪治郎領知本名阿保、館有
- 一、血牛村、血牛六郎領知本名阿保、館有
- 一、中柴内村、中柴内八郎領知本名阿保也、柴内弥治郎一門館有
- 一、折加内村、折加内甚右エ門領知本名阿保也、柴内弥治郎一門館有
- 一、高市村、高市玄番領知本名成田、館有（追筆）
- 一、新斗米村、新斗米左近領知本名奈良、館有
- 一、大湯村、大湯左エ門家来領地本名奈良の惣領也、嫡子四郎左エ門二男治郎左エ門、三男彦左エ門、右四郎左エ門天正一九年九戸へ一味仕被生捕九と一処に三迫にて切腹、治郎左エ門彦左エ門は津輕へ落行後に次郎左エ門被召出知行貳百石拝領ス、彦左エ門は津輕ニ奉公ス、大湯村後ニハ大湯五兵衛領知
- 一、小枝指村、小枝差左馬領知本名奈良也、館有
- 一、小平村、小平彦次郎領知本名奈良也、小枝指之末弟也、館有（追筆）
- 一、神田村、神田十郎領知本名成田、居館碁石館有
- 一、毛馬内町、毛馬内備中領知本名成田之惣領也、後ニ南部靱負信繼領知天文年中三戸より被遣知行高貳千石村数毛馬内・瀬田石・大欠・赤澤・柏鉢・鰐口屋敷・管生鉢成候、毛馬内ニ館有
- 一、瀬田石村、瀬田石太郎左エ門領知館有、本名奈良、後に毛馬内大学領知家来月館隱岐知行分志和陳時隱岐武者奉行被仰付、忠擢る月館村七百石被下
- 一、大地村、大地甚之進領知本名成田、
- 一、小坂村、小坂筑後領知本名秋元、館有、後に大湯五兵衛領知
- 一、濁川村、濁川但馬領知本名秋元、館有、
- 一、荒川村、荒川備中領知本名成田、館有、
- 一、八幡館村、秋元兵部少領知砂子澤の事、館有
- 一、高清水村、高清水豊後領知本名成田、館有
- 一、関上村、関上安房領知本名成田、館有、
- 一、芦名澤村、芦名澤太郎兵衛領知本名奈良、館有、式部の館芦名澤観音札所也
- 一、草木村、奈良越後領知寺坂室田、居館丸館也
- 一、高梨子館村、高梨子土佐領知本名秋元、高瀬周防一門子無之絶、館有、後に奥四郎左エ門領ス、この四郎左エ門糖部三戸より文明中に来る、川原館に居す

鹿角市史第1巻より転載した。

鹿角由来集に記載された館跡				
番号	館名	館主名	○館跡地	所在地
1	高清水館跡	高清水景後	(成田)	鹿角市十和田山御字久戸
2	芦名氏館跡	芦名沢太郎兵衛	(奈良)	山根字向田・字上砂沢
3	島家館跡	北島昌教		大湯字上折戸
4	大坊館跡			毛馬内字大坊館
5	瀬田石館跡	瀬田石太郎左衛門	(奈良)	瀬田石字小館跡ほか
6	目麻館跡	毛馬内備中	(成田)	毛馬内字古館ほか
7	柏崎館跡			毛馬内字柏崎ほか
8	間上(神)館跡	間神安房	(成田)	大湯字間上ほか
9	鹿倉館跡			大湯字古館ほか
10	大湯館跡	大湯佐左衛門督	(奈良)	大湯字和町
11	深返館跡			大湯字和町
12	草水館跡			草水字館下夕
13	丸館跡			草水字丸館ノ下
14	高梨館跡	高梨土佐	(秋元)	末広字高梨子館ほか
15	松山館跡			末広字不動平
16	藤石館跡	神田十郎	(成田)	末広字神田沢
17	太田谷地館跡			花輪字太田谷地ほか
18	高屋館跡	高屋筑前	(秋元)	花輪字高ノ沢ほか
19	花輪茶臼館跡			花輪字茶臼館ほか
20	高瀬館跡	高瀬土佐	(秋元)	花輪字高瀬ほか
21	一ツ森館跡			花輪字一ツ森ほか
22	小枝指館跡	小枝指左馬之助	(奈良)	花輪字小枝指ほか
23	平元館跡			花輪字平元ほか
24	新斗米館跡	新斗米左近	(奈良)	花輪字新斗米
25	小平館跡	小平彦次郎	(奈良)	花輪字小平ほか
26	高市向館跡			花輪字高市向
27	高市館跡	高市次	(成田)	鹿角市花輪字高市
28	万谷野館跡			花輪字万谷野
29	地蔵野館跡	中薬内八郎	(安保)	花輪字地蔵野
30	柴内館跡	柴内弥次郎	(安保)	花輪字西町・字乳牛平ほか
31	乳牛館跡	乳牛六郎	(安保)	花輪字乳牛平ほか
32	妻ノ神館跡			花輪字妻ノ神ほか
33	黒土館跡	黒土丹後	(秋元)	花輪字下夕町
34	花輪古館跡	依・花輪次郎	(安保)	花輪字古館ほか
35	花輪館跡			花輪字中花輪ほか
36	孫右エ門館跡			花輪字孫右エ門ほか
37	かいぬま館跡			尾去沢字土沢
38	赤白館跡			尾去沢字新館ほか
39	上山館跡			尾去沢字上山ほか
40	尾去館跡	尾去建中	(安保)	尾去沢字尾去ほか
41	松館跡	松原祐前	(安保)	尾去沢字天神館ほか
42	石鳥谷館跡	石鳥谷九郎	(安保)	八幡平字石鳥谷ほか
43	伊勢堂館跡			八幡平字伊勢堂
44	上ミ和志館跡			八幡平字上ミ和志館ほか
45	長内館跡	長内刑部	(成田)	八幡平字長内ほか
46	長内古館跡			八幡平字長内古館ほか
47	三ヶ田館跡	三ヶ田左近	(阿保)	八幡平字三ヶ田・字上囉ほか
48	玉内館跡	玉内大次郎	(安保)	八幡平字玉内ほか
49	下館跡			八幡平字駒林・字下馬岡
50	大里館跡	大里上總守	(安保)	八幡平字大里・字場合
51	小豆沢館跡	小豆沢駿河	(秋元)	八幡平字小豆沢ほか
52	道瀬館跡	道瀬中務	(成田)	八幡平字道瀬古館
53	長峰館跡A	長峰下総		八幡平字瀬東館・字西館ほか
54	長峰館跡B			八幡平字新館ほか
55	白懸館跡	白懸勘解由		八幡平字白懸
56	長牛館跡	秋元源正左衛門		鹿角市八幡平字長牛・字カラヌ田ほか
57	夏井館跡	夏井恒馬	(安保)	八幡平字夏井・字中山ほか
58	谷内館跡A	谷内三郎		八幡平字谷内下毛平ほか
59	谷内館跡B			八幡平字谷内
60	谷内高館			八幡平字堂町
A	田山館跡	田山右京進		岩手県二戸郡安代町字夏ノ野
B	佐比内館跡	佐比内采女		岩手県二戸郡安代町館市

※印は、鹿角由来集に記載された館跡
 ○本表掲載にあたり、下記の資料を用いた
 『秋田県史』(下巻) 秋田県文化財調査報告書第8巻 秋田県教育委員会 1981年
 『秋田県史』(中巻) 秋田県文化財調査報告書第7巻 秋田県教育委員会 1981年
 『秋田県史』(上巻) 秋田県文化財調査報告書第6巻 秋田県教育委員会 1981年
 『鹿角由来集』(鹿角市文化財調査報告書) 鹿角市教育委員会 1980年

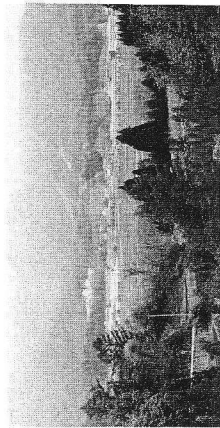


第11図 館跡分布図

参考文献

- 東京大学東洋文化財研究所 『館址 東北地方における集落址の研究』
東京大学出版社 1958年
- 青森県教育委員会 『中の平遺跡』 1975年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 1981年
「天戸森遺跡」
『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 1994年
- 鹿角市 『鹿角市史第Ⅰ巻』 1982年
- 鹿角市教育委員会 『天戸森遺跡発掘調査報告書』 1984年
『天戸森の土器 天戸森遺跡出土縄文土器図録』 1990年
『鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書』 1986年
『黒土館跡発掘調査報告書』 1996年
『地羅野館跡発掘調査報告書』 1993年
『小枝指館跡発掘調査報告書』 1992年
『花輪古館跡発掘調査報告書』 1994年
- 富樫泰時・安村二郎 『秋田県』『日本城跡大系 2』新人物往来社 1980年
- 安村二郎ほか 『鹿角地方の館跡 航空写真測量調査に関して』
『よねしろ考古 4』よねしろ考古学研究会 1988年
- 村越 潔 『円筒土器文化』雄山閣 1974年
- 永井久美男 編 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類』兵庫県埋蔵銭調査会
1994年
- 浪岡町教育委員会 『浪岡城跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅹ』1978年～
- 鹿角市企画部秘書広報課 広報『かづの』「ふるさとの歴史風景1～29」
安村二郎 記
- 矢部倉吉 『古銭と紙幣』—収集と鑑賞—金園社 1973年

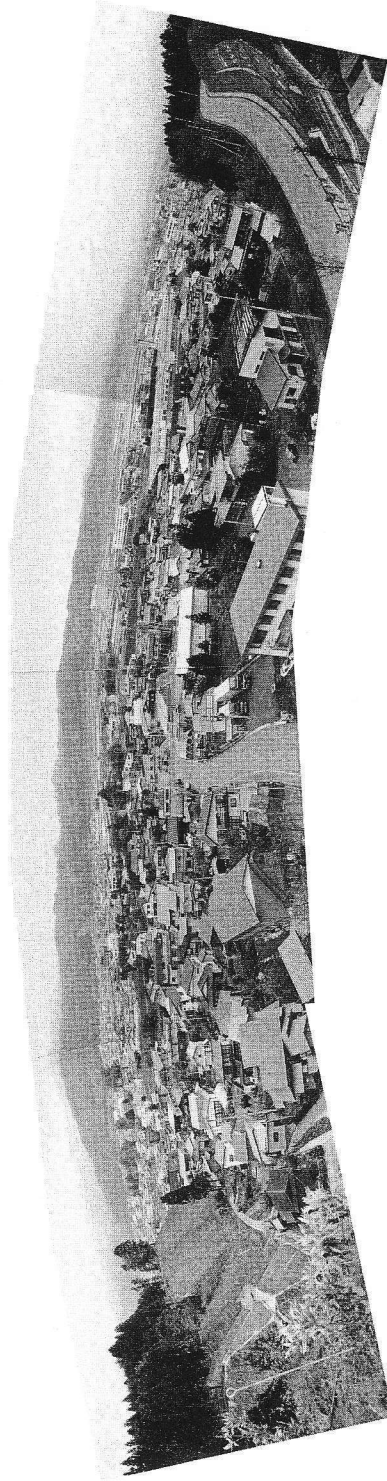
PL1 黒土館跡全景(1)



高瀬館方向から黒土館を望む



調査地全景（後の山が鹿角総合運動公園）

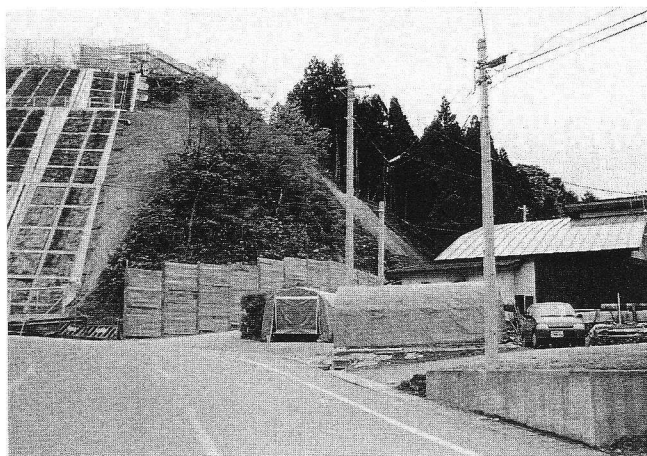


黒土館から鹿角盆地を望む



P L 2 黒土館跡全景(2)

近景 ▶



近景 ▶



郭上面トレンチ ▶



P L 3 近景・郭上面トレンチ

第Ⅰ期の状況 ▶



第Ⅰ～Ⅱ期の状況 ▶



第Ⅲ期の状況 ▶



PL 4 第Ⅰ期～Ⅲ期の状況

第Ⅳ期の状況 ▶



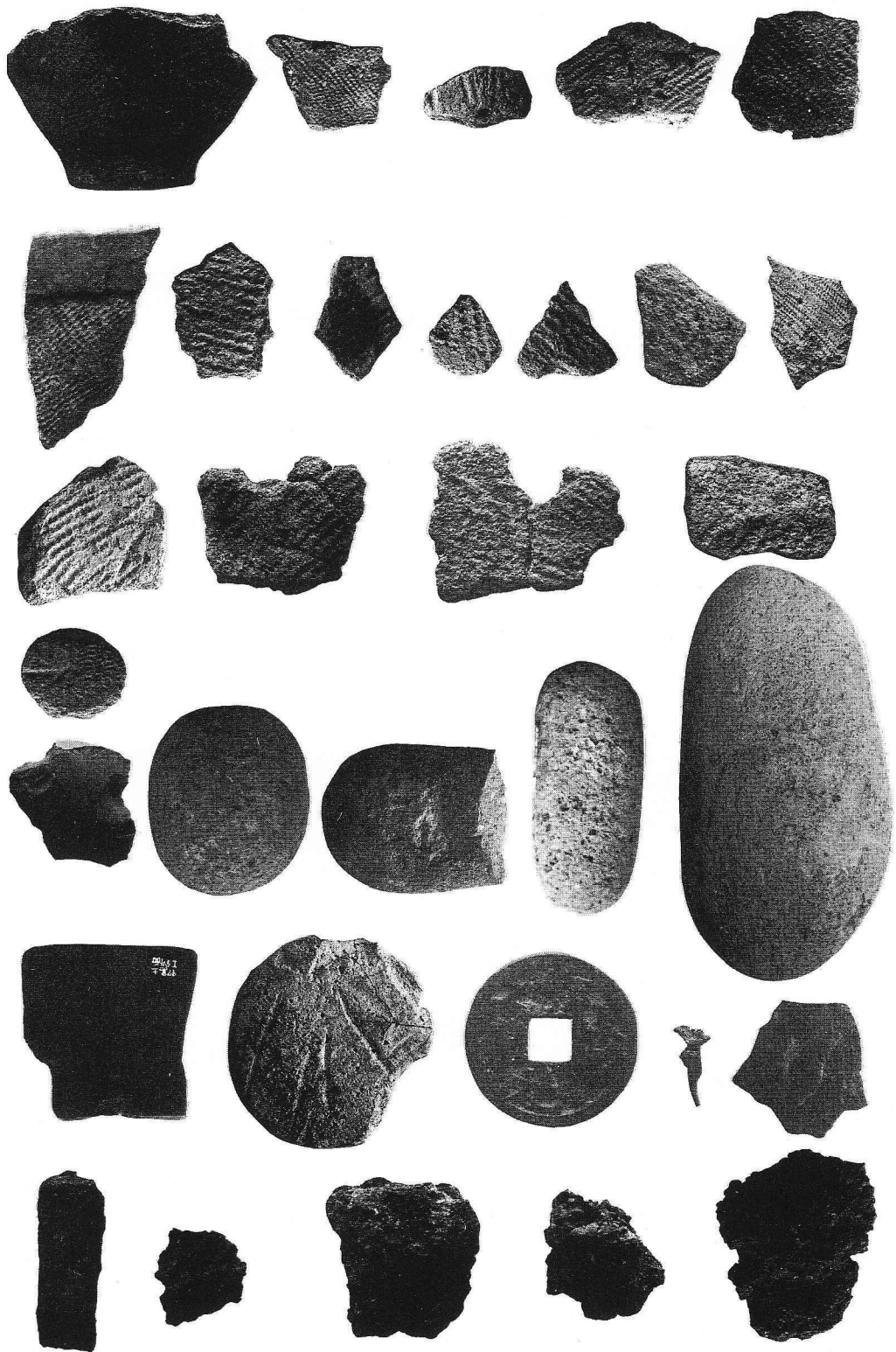
北側土層断面 ▶



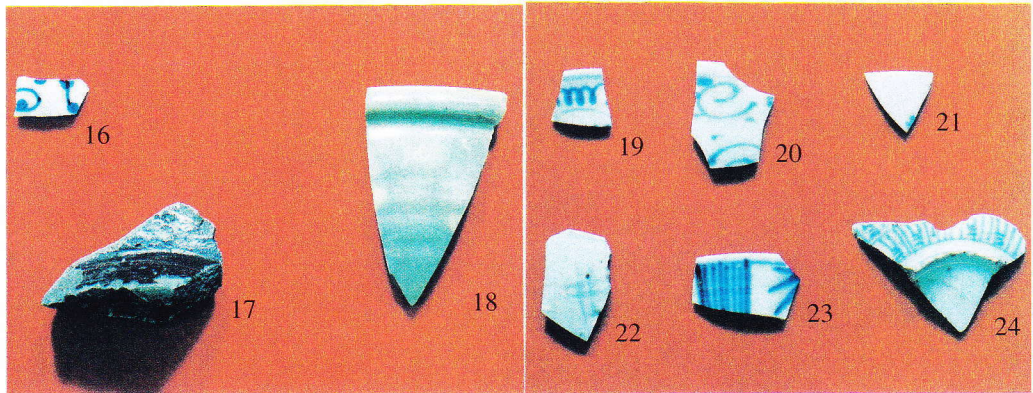
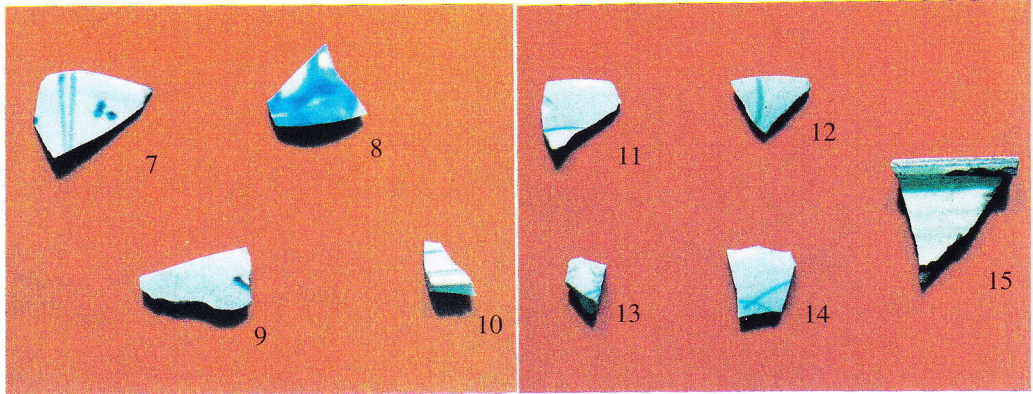
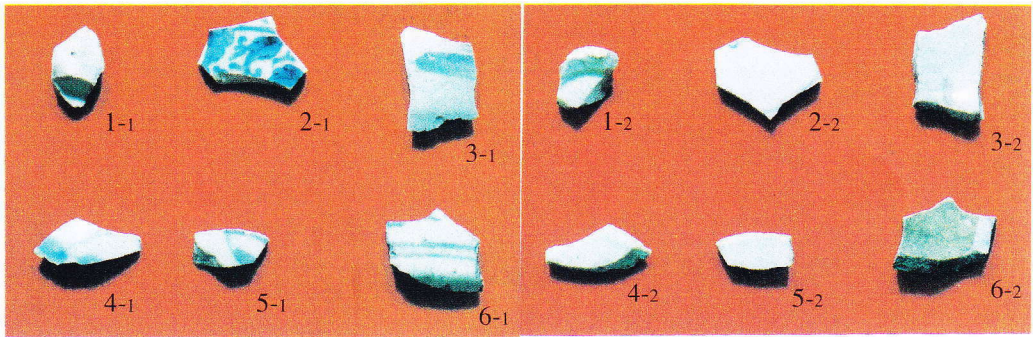
南側土層断面 ▶



P L 5 第Ⅳ期の状況・土層断面



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	くろとたてあと はつくつちようさほうこくしよ							
書名	黒土館跡発掘調査報告書(3)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料							
シリーズ番号	62							
編著者名	藤井安正・花海義人 (鹿角市教育委員会 生涯学習課)							
編集機関	鹿角市教育委員会							
所在地	〒018-5292 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1 TEL 0186-30-1111							
発行年月日	西暦1998年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろとたてあと 黒土館跡	あまたけん かつのし 秋田県鹿角市 はなわあざ 花輪字 した まち 下夕町 ほか	05209	306	40度 11分 73秒	140度 47分 93秒	19970418 ～ 19970523	447	急傾斜崩 壊防止事 業に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
黒土館跡	館跡	中世	帯郭段築 2段 空堀 2条 小平場 1段		陶磁器 縄文土器(縄文中期) 石器(石匙・搔器など) 鉄製品(鉄屑を含む)		「鹿角四十二館」 のひとつで7郭か ら構成される。 館主は黒土三郎と 伝えられる。 調査は館跡の北 端部であったが、 館跡の構造の一端 を知ることが出来 た。	

鹿角市文化財調査資料 62

黒土館跡発掘調査報告書(3)

発行年月日 平成10年3月31日

発行者 鹿角市教育委員会
〒018-5292 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1
☎ 0186-30-1111

印刷所 〒018-5141 秋田県鹿角市八幡平字高見田50
(資)石木田印刷所
